

Title	伝寂蓮筆六半切『古今和歌集』考
Author(s)	寺田, 伝
Citation	語文. 2017, 108, p. 25-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71006
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 伝寂蓮筆六半切『古今和歌集』考

はじめに

ŋ

る六半形の断簡である(以下、伝寂蓮筆切)。 美氏『古筆学大成』が「伝寂蓮筆古今和歌集切(一)」と分類す 的に右衛門切が広く知られるが、本稿で取り上げるのは、小松茂 その伝寂蓮筆切の本文について、はやく小松氏が「『基俊本』 伝称筆者を寂蓮とする『古今和歌集』の古筆切としては、一般

しては る。ただし、その第一次本のなかで、ある程度まとまった伝本と のなかでも最も早い段階である第一次本系統に属するとされてい 久曾神昇氏の『古今和歌集成立論』の系統分類によれば、公稿本 (3) の面目を伝える一本」と指摘し、注目されてきた。基俊本とは、

①ノートルダム清心女子大学蔵黒川文庫本(以下、黒川本 ②志香須賀文庫蔵伝後醍醐天皇筆本(以下、 志香須賀本

の二本しかなく、さらにいえば、

①黒川本は、近代の転写本であ

寺 田

伝

筆資料にも目を向ける必要があると考える。 は、純粋な本文を伝えているとは必ずしも言えず、それゆえに古 本・定家本によって校合が加えられているとのことである れるが、その奥書によれば、本文は清輔本を底本として、 また、同じく②志香須賀本についても、鎌倉後期の書写と推測さ このように、現在、第一次本系統として位置づけられる基俊本 かつ基俊本の本文は校合注記によって知られるのみである。 基俊

## 伝寂蓮筆切について

をあわせれば、 鎌倉初期から中期頃と推測される。『古筆学大成』では、わずか 和歌二行書き、詞書は和歌より二字ほど下げて書く。書写年代は きさは、 .葉が掲載されるばかりであるが、それ以降に紹介された断簡等 伝寂蓮筆切は、 縦17・7㎝×横15・6㎝。一面は七行~十一行と不定で かなりの数にのぼる。 もと綴葉装六半形の冊子本で、料紙は楮紙。大

ものである で、『古筆学大成』 られるので、 もと同一写本から切り出された、 その一 覧を示す前に、 以下、 触れておきたい。 が「伝慈円筆古今和歌集切 伝慈円筆切)。 伝寂蓮筆切には、 それは伝称筆者を慈円とする断簡 いわゆる異伝のツレの断簡がみ 伝称筆者こそ違えども (四)」と分類する

慈円筆切」、下段が「伝寂蓮筆切」である。 ぞれ同字が用いられている箇所を抜き出したもので、 るが、次に示すように筆跡は同一のものと思しい。 ほど下げて書いている。 七行と十行のものがあるが、 したい。大きさは、 まず、伝慈円筆切の書誌を、『古筆学大成』に拠りながら確認 縦17·2 m×横15·2 料紙については記載がないので不明であ 和歌二行書き、詞書は和歌より二字 cm o 書写形式は 次表は、 上段が「伝 それ 面

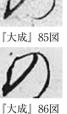
#### a ヮ 「伝慈円筆切





『影印解説』29図 (鎌倉・吉野時代)

#### 伝寂蓮筆切



同一筆者による書き癖と認められよう。

は、「読人」に対して「不知」が小さく書かれている点なども、

## (c) 「読人不知

『大成』86図

『大成』 241図

的な連綿によって書かれている。あるいは、 みられる。また、(b)「素性法師」では、針をまげたような特徴 停滞している様子うかがえ、 れるが、具体的に述べると、 右掲のように、 いずれのも大変癖のある字で、 入筆が曲線から少々はみ出す傾向が (a) 「の」は、 曲線が角ばり、 ( c) 「読人不知」で 同筆の趣をみてと

は、 関する異伝の問題は、 断簡においては、ごくわずかな数ではあるが、このような筆者に 出された異伝のツレであることが認められてもよいと考える。 以上、伝寂蓮筆切と伝慈円筆切とは、もと同一の写本から切り "新編国歌大観』に拠る)。 伝寂蓮筆切の一覧を示すと、 今後とも整理がなされてゆかねばなるまい。 以下の通りになる(歌番号

2	1	No.
『古今和歌集成立論』132図	(鶴見大学図書館蔵)	所載先
恋二50作者~56和歌	恋一級詞書~82和歌	部立・歌番号
現久保木秀夫氏蔵		備考

_	_				_																_
24)	23	22	21)	20	19	18)	17)	16)	15)	14)	13	12	11)	10	9	8	7	6	(5)	4	3
『平成新修古筆資料集 四』59図	『古筆の楽しみ』3図	『古筆学大成』 87図	(個人蔵)	『古典籍展観大入札会目録』平成23年	(鶴見大学図書館蔵)	『古筆学大成』 86図	『思文閣墨跡資料目録』238号	(架蔵)	『古筆切影印解説I』 30図	『思文閣墨跡資料目録』23号	『古筆学大成』242図	『古筆学大成』 85図	(久保木秀夫氏蔵)	(鶴見大学図書館蔵)	『古筆切影印解説Ⅰ』29図	(鶴見大学図書館蔵)	『古筆学大成』 241図	『思文閣墨跡資料目録』 221号	『古筆学大成』 84図	『思文閣墨跡資料目録』 216号	『古筆手鑑披香殿 下』24図
大歌 186左注~186和歌	大歌 188詞書~ 188左注	大歌『和歌~『問詞書	大歌 ⑾詞書~ ⑿和歌	雑躰100長歌~100長歌	雑躰100長歌~100和歌	雑下95作者~97作者	雑下96作者~96作者	雑下956作者~958作者	雑下州和歌~946作者	雑上882和歌~88詞書	雑上88詞書~81和歌	哀傷85詞書~859作者	哀傷巻頭82~83和歌	恋五807和歌~809和歌	恋五80作者~802和歌	恋五762次異本歌~766和歌	恋四720左注~724作者	恋四巻頭77~679和歌	恋三672和歌~676和歌	恋三昭和歌~皓詞書	恋二59和歌~59和歌
				現鶴見大学図書館蔵							異伝				現鶴見大学図書館蔵		異伝				

して、伝寂蓮筆切について考察してゆきたい。
ることが可能となったと考える。本稿は、この一覧を調査対象と伝存を確認することができ、従来よりもその本文的性格を把握すこのように現時点では二十四点(丁面でいえば、約三十一面)の

### 三. 部類名

まず断簡⑥の本文を掲げる。切には、部類名を備えた断簡が二葉伝存しているので、以下に、切には、部類名を備えた断簡が二葉伝存しているので、以下に、すでに先学の指摘されるところもあるが、伝寂蓮筆切において、

#### 断簡⑥

古今和歌集巻第十四 七十二首

恋部四

題不知 読人不知

かつみるひとをこひやわたらん (研)みちのくのあさかのぬまのはなかつみ

#### 貫之

みすはこひしとおもはさらまし (碗)いそのかみふるのなかみちなか(~)に

四」とあるのとは相違していることがわかる。なお、当該断簡で論』によって諸本を参照するに、通行の定家本をはじめ「恋歌ここで部類名が「恋部四」と記されているが、『古今和歌集成立

ので誤脱と思しいが、この点については後述したい。「個番歌を欠いており、諸本を参照しても、いずれの伝本に存する

つづいて、同じく部類名を伝える断簡⑪を掲げる。

#### ○断簡⑴

正 京 宗 耶 集 巻 第 十 六 一 卅 五 首

よめる

小野篁

なくなみたあめとふりなはわたりかは

みつまさりなはかへりくるかに (80)

左おほいまうちきみしらかはの

と記されている。このことから伝寂蓮筆切が部類名を「恋部四この断簡⑪においても、先掲の断簡と同様、部類名が「哀傷部あたりにおくりけるよしを読る

められるが、久曾神氏は、それらを大きく三種に分類しておられにおける部類名の様相は、諸本によって実にさまざまな形式が認「哀傷部」と記す伝本であったことが知られよう。『古今和歌集』

初案部類名 春部上 春部下 夏部… (黒川本)

私にまとめると次のようになる。

その分類を、

再案部類名 春上春下夏…(私稿本・元永本)

山 荘 本・静 嘉 堂第三案部類名 春歌上 春歌下 夏歌…(志香須賀本・雅俗

本・俊成本・定家本・雅経本・清輔

く、また、伝寂蓮筆切と基俊本との関係の深さを窺わせるのである、また、伝寂蓮筆切と基俊本との関係の深さを窺わせるのである。とは、まさしくそのような部類名が、当該断簡が書写された鎌江において、実際に用いられるばかりであったという点である。とは、まさしくそのような部類名が、当該断簡が書写された鎌江とは、まさしくそのような部類名が、当該断簡が書写された鎌江とは、まさしくそのような部類名が、当該断簡が書写された鎌江とは、まさしくそのような部類名が、当該断簡が書写された鎌江とは、まさしくそのような部類名が、当該断簡が書写された鎌江において、実際に用いられていたことを証しているのである。それゆえに、ここに掲げた部類名を伝える断簡二葉の意義は大きなれるである。

#### 四:歌数

る。

知することも可能であろう。 知することも可能であろう。 とえば、「古今和歌集巻十四」「古今和歌集巻第十六」という内題 ある。伝寂蓮筆切はあくまで断簡であるため、その全貌を窺い知 ある。伝寂蓮筆切はあくまで断簡であるため、その全貌を窺い知 ある。伝え道、「古今和歌集巻十四」「古今和歌集巻第十六」という内題

たがって、伝寂蓮筆切は、通行の定家本にはない異本歌を有して一方、断簡⑥においては歌数が「七十二首」と記されている。し通行の定家本における巻十四の歌数は「七十首」であるが、そのまずは、断簡⑥の巻十四・恋四の歌数についてみてゆきたい。

#### 〇異本歌 (1)

は次のとおりである。

諸本を参照するに、巻十四における異本歌

こひたてまつりてひとりゐてよめるそとをりひめのひとりゐてみかとを

わかせこかくへきよひなりさ、かにの

くものふるまひかねてしるしも

## 〇異本歌(2)

みちしらはつみにもゆかむすみのえの

きしにをふてふこひわすれくさ

#### 異本歌(3)

わかまへゆかはあゆみと、まれまなつるのあしけのこまやなかぬしの

ほか、俊成本の永暦二年本では①・②の歌が墨滅されており、ま本の本文を伝える黒川本・志香須賀本にみえる歌であるが、そのこのように、巻十四には、異本歌が三首確認され、いずれも基俊

清輔本の諸本においては②・③の歌を有していることが知ら

伝寂蓮筆切の歌数からすれば、右掲のいずれかの異本歌を二首

れる。

ば、伝寂蓮筆切も右掲の三首を有していたと考えられる。を参照するに、伝寂蓮筆切の誤脱とみられ、仮にその一首を補えिの番歌を欠いていたことには注意しておきたい。この欠落は諸本有していたとみられるが、ただし、先述したように伝寂蓮筆切は

はおそらく異本歌を一首有していたと推測される。そこで諸本を通行の定家本において巻十六は「三十四首」であり、伝寂蓮筆切つづいて、断簡⑪の巻十六・哀傷の歌数「卅五首」について、

#### ○異本歌

みるに、巻十六の異本歌は次の一首が確認される。

諒闇のとし冷泉院のさくらをみてよめる

尚侍広井女王

ことしはさかすともにかれなんこ、ろなきくさきといへとあはれなり

この歌は、基俊本の本文を伝える志香須賀本のみが有する異本歌であることが知られる。一方で、黒川本に何も記されないことはであることが知られるようである(実際に、巻十六以降にかけ少なからず見受けられるようである(実際に、巻十六以降にかけ少なからず見受けられるようである(実際に、巻十六以降にかけかなからず見受けられるようである(実際に、巻十六以降にかけてあることが知られるようである(実際に、巻十六以降にかけてあるとはであることが知られている。

いても、伝寂蓮筆切は、基俊本にみえる異本歌を同様に有していりについて検討したが、それによって想定できる歌の出入りにお以上、巻頭を伝える断簡に記された歌数から、各巻の歌の出入

Ŧi. 伝わっている。まずは、 一の部分で、本文は以下のようになっている。 さらに、伝寂蓮筆切には、実際に、異本歌を有する断簡が二葉 断簡⑧を掲げたい。内容は、 巻十五・恋

としふれは心やかはるあきの夜の

わかそてにまたきしくれのふりぬるか なかきもしらすねしやなにとき

人の心にあきやたつらむ

763

無職

山のゐのあさき心もおもはぬを

かけはかりのみ人のみゆらん

 $\widehat{764}$ 

わすれくさたねとらましをあふことの

いとかくかたきものとしりせは

765

こふれともあふこのなきはわすれくさ

ゆめちにさへやおひしけるらん

766

蓮筆切が、

基俊本と近似していることが知られるのである。

この断簡⑧の一首目「としふれは」の歌は、いうまでもなく通行 見受けられ、諸本においては、黒川本・志香須賀本をはじめ、清 の定家本にはないが、この異本歌を有している伝本は比較的多く

巻十八・雑下の部分。 また、次にもう一首、 異本歌を有する断簡⑤を掲げる。 内容は、

になる。

輔本の諸本が有していることが知られる。

山さとはものわひしかることこそあれ よのうきよりはすみよかりけり

944

惟高御子

すめはすみぬるよにこそありけれ しら雲のたえすたなひくみねにたに

945

多治比安任

さはきなき雲のはやしにいりぬれは いとゝうきよのいとはるゝかな

この断簡⑤の三首目「しら雲の」の歌は、 布留今道 基俊本の本文を伝える志香須 通行の定家本をはじめ

質本が有していることが知られる。 として無いが、諸本を参照するに、 (4) 志香須賀本にみえることから、異本歌という点においても、 り、その異本歌はいずれも基俊本の本文を伝える黒川本あるいは このように伝寂蓮筆切には、異本歌を有する断簡が伝わってお

## 六. 本文異同

と一致する諸本の例をまとめると、後掲の【本文異同表】のよう 伝寂蓮筆切と、定家本とを比較して、そこで見出された異同本文 つづいて、伝寂蓮筆切の本文異同についてみてゆきたい。まず、

伝寂蓮筆切を第一次本系統に位置づけてよいと考える。 は伝寂蓮筆切が基俊本と親近性があることが認められ、もって、なおせるのが、黒川本の十九例である。これによって、おおむ例中、最も一致するのが、志香須賀本の二十一例で、つづいて一その一覧によって、全体的な傾向を俯瞰してみると、全四十三

指摘される所以であろう。 指摘される所以であろう。 指摘される所以であろう。 また、それとほぼ同数の一致をみせているのが、清輔本のなかまた、それとほぼ同数の一致をみせているのが、清輔本の一致数の高さは、 (a) と をれ、田中登氏も「清輔本系統の要素が色濃く投影している」と され、田中登氏も「清輔本系統の要素が色濃く投影している」と され、田中登氏も「清輔本系統の要素が色濃く投影している」と され、田中登氏も「清輔本系統の要素が色濃く投影している」と され、田中登氏も「清輔本系統の要素が色濃く投影している」と され、田中登氏も「清輔本系統の要素が色濃く投影している」と され、田中登氏も「清輔本系統の要素が色濃く投影している」と され、田中登氏も「清輔本系統の要素が色濃く投影している」と され、田中登氏も「清輔本系統の要素が色濃く投影している」と され、田中登氏も「清輔本系統の要素が色濃く投影している」と

しかしながら、前述してきた部類名や異本歌の出入りなどを勘案すれば、必ずしも清輔本とは認めがたく、また、伝寂蓮筆切と清輔本との間においてのみ共通して異文が生じる例も見受けられないことは、やはり、伝寂蓮筆切と清輔本との距離を感じさせる。むしろ、そのような共通異文の例は、黒川本や志香須賀本との間むしろ、そのような共通異文の例は、黒川本や志香須賀本との間むしろ、そのような共通異文の例は、黒川本や志香須賀本との間に多く確認され、伝寂蓮筆切と素すれば、必ずしも、

て、 ゆくうご にてもなをうきときはいつちむ にてもなをうきときはいつち

○伝寂蓮筆切

とけなきこを見てよめるものおもひ侍けるときい

ときなきこをみてよめる

さときはいつち|てもなほうきときはいつちゆくにいるひとやま|よをうしとやまへいる人やまに(断簡⑯)

との近しい関連性が認められるが、その本文を伝える黒川本や志以上、細かな本文異同について検討した結果、おおむね基俊本えているとみるのは控えておくべきであろうと考える。次本系統に位置づけられるものの、基俊本の本文をそのままに伝

数える。このような例をみるにつけ、伝寂蓮筆切は、

さらに、伝寂蓮筆切は独自異文も多くみられ、

実に四十一

例を

確かに第一

を抄出して掲げる

する例も多数見受けられる。

なかでも鋭く対立する断簡値の本文 黒川本が示す基俊本の本文とは相違

とはいえ、伝寂蓮筆切が、

とが想起されてしかるべきであろうし、また、 われる。 文を伝える黒川本や志香須賀本における問題でもあるようにも思 れは写本という性質上、 香須賀本のいずれかに収束されることはなかった。 伝来の過程において他系統と接触したこ それは基俊本の本 もちろん、

現 の性格をより一層明らかにするためにも、 いたことは、なお注目してあまりある。今後、基俊本という伝本 の出入りといった大きな枠組みにおいて、 が期待されるのである。 ただ、これまで述べてきたように、伝寂蓮筆切が、 基俊本と一致をみせて 伝寂蓮筆切の新たな出 部類名や歌

#### 七

される断簡⑫を、その書式にあわせて翻刻すれば次のようになる。 るといった特徴も見受けられる。ここで、 伝寂蓮筆切の書誌は、 最後に、 伝寂蓮筆切にみられる特徴的な書式について述べたい 先掲の通りであるが、詞書も二行に書写す 『古筆学大成』に所収

なりにけるによみておきて まかりにける

なきとこにねむきみそかなしき (88)こゑをたにきかてわかる、たまよりも

やまひにわつらひはへりける秋 心ちのたのもしけなくおほえけ

ける
れはよみてひとにつかはし

大江千里

あるが、 あるように思われる。 のにあわせて詞書の形式も統一させたものかと考えられるが、 れている。このような書式は、おそらく和歌が二行に書写される 右のように、 なく、その書式も継承されることが当然あってもよいと思うので 『古今和歌集』の諸本をみても、 一ついて簡潔ながら述べたい。 以下に管見に入った同一の書式の資料を示し、その本文 伝寂連筆切では、 写本であるがゆえに、 89番の詞書が二行に分けて書写さ まず確認できない特殊な様式で 親本の本文ばかりで

# 真田本『古今和歌集』下帖

15・2 ㎝の六半形で、 ここで対象とするのは下帖である。大きさは、 の上下二帖であるが取り合わせ本で、それぞれ別種のものである。 おらず、その後、滝沢貞夫氏によって報告された伝本である。(8) 伝本の研究』、久曾神昇氏『古今和歌集成立論』では紹介されて が所蔵されている。この真田本については、西下経一氏『古今集 現 在、 まその論考よって、 長野県の真田宝物館には真田本と称する『古今和歌集』 料紙は鳥の子紙を用いており、 真田本を概観したい。 真田本は、 縦 16 書写年代は 0 綴葉装 cm X 横

鎌倉初期頃と推測されている。そして次に示すように、

伝寂蓮筆

切と同じく、詞書を二行に分けて書写している。

も人にこ、ろを、きつしらなみ(船)たちかへりあはれとそをもふよそにて

#### 紀貫之

のめにみぬ人もこひしかりけり (船)よのなかはかくこそありけれ吹風

けれはよみてつかはしけるれよりをんなのほのかに見えてにたてたるくるまのしたすた

右近の馬場のひをりのひむかひ

の要素を持つ注目すべき本文である」と述べておられる。本といわれる基俊本・元永本に近く、清輔本・本阿弥切とも共通本といわれる基俊本・元永本に近く、清輔本・本阿弥切とも共通にのように真田本も、伝寂蓮筆切と同じく詞書を二行にわけて書

おちたきつかはせにうかふうたかたも○異本歌⑴

また、その本文中には次のような異本歌もみられる

# 思はさらめや恋しきことをおちたきつかはせにうかふ

いさとこたゑてわかなもらすな○異本歌②

# 此歌或人天智天皇の近江の采女に

給けるとなむいひつたえたる

本歌が看取されることはなお注意されよう。 本歌が看取されることはなお注意されよう。 本歌が看取されることはなお注意されよう。 本歌が看取されることはなお注意される歌で、②は黒川本・志香須 との二首以外には異本歌を有していないものの、伝寂蓮筆切と同 であった真田本に、同じく基俊本の本文との近似性や、異 にあ、元永本・清輔本の諸本にみえる歌で、②は黒川本・志香須 はあ、元永本・清輔本の諸本にみえる歌で、②は黒川本・志香須 はあ、元永本・清輔本の諸本にみえる歌で、②は黒川本・志香須 はあ、元永本・清輔本の諸本にみえる歌で、②は黒川本・志香須 は、まで、②は黒川本・志香須 は、まで、②は黒川本・志香須 は、まで、②は黒川本・志香須 は、まで、②は黒川本・志香須

## 伝九条兼実筆六半切

そこで紹介された断簡もやはり次のような書式をとっている。いても紹介されており、書写年代は、鎌倉初期と推測されている。は縦15・1 四×横14・9 四。『平成新修古筆資料集』第一集におは縦15・1 四×横14・9 四。『平成新修古筆資料集』第一集におまた、同じく伝寂蓮筆切と同様の書式である資料として、伝九また、同じく伝寂蓮筆切と同様の書式である資料として、伝九また、同じく伝寂蓮筆切と同様の書式である資料として、伝九また、同じく伝寂蓮筆切と同様の書式である資料として、伝九また、同じく伝寂蓮筆切と同様の書式である資料として、伝九また、同じく伝寂蓮筆切と同様の書式である資料として、伝九また、同じく伝寂蓮筆切と同様の書式である資料として、伝九また、同じく伝叙述をいる。

たてまつりけるはせたまひける御返事

伊勢

ひかりをのみそたのむへらなる (%)ひさかたのなかにそひたるさとなれは

ける餞せんとてけふいひつかはきのとしさたかあはのかみにまかり

りけれはよみてつかはしける ありきてよるまでまうてこさ したりけるにこ、かしこにまかり

伝九条兼実筆切の本文系統については、断簡の伝存数が少ないた のに判然としない部分もあるが、なかでも注意されるのは、『古 のに判然としない部分もあるが、なかでも注意されるのは、『古 のに判然としない部分もあるが、なかでも注意されるのは、『古 のと である。巻十六哀傷の巻 である。巻十六哀傷の巻

哀傷 □ 十六或法

き」という異本歌を存していたと考えられるのである。おち、この伝九条兼実筆切においても、広井女王詠の「こころな首」とあって、伝寂蓮筆切と一致していることが知られる。すな「哀傷」と異なるものの、内題の下に記される歌数には「三十五これは先にみた伝寂蓮筆切の断簡⑪と同じ箇所で、部類名こそ

例も見受けられ、各々の資料の具体的な位置付けついてはより詳からず有していることが想定される。もちろん、相互に対立する行に分ける書写形式をもつ伝本は、いずれも基俊本の本文を少な形式をもつ資料について概観したが、詞書(あるいは左注)を二以上のように、伝寂蓮筆切にみられる書式から、それと同様の以上のように、伝寂蓮筆切にみられる書式から、それと同様の

本の受容を考える上で、重要な資料となり得るであろうと考える。今和歌集』の本文を伝えているとみてよく、基俊本と称される伝細な検証が必要であるが、いずれも平安期以来行われていた『古

#### ハ. おわりに

る。

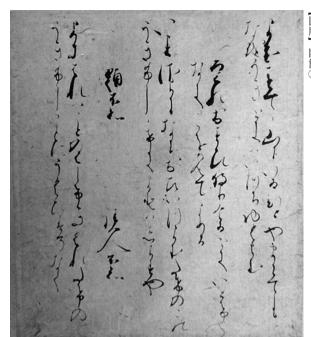
ない、伝統連筆切について考察してきたが、その本文系統は、部類名や異本歌の出入り等から、第一次本に位置づけられるは、部類名や異本歌の出入り等から、第一次本に位置づけられるは、部類名や異本歌の出入り等から、第一次本に位置づけられる。

書式の類似性から指摘した。りほかないが、その基俊本の本文を伝える可能性がある資料を、らできない。したがって、現状では、新たな資料の出現を待つよ寂蓮筆切が基俊本をそのままに伝えているとみることは残念なが収 しかしながら、その一方で黒川本とは対立する例もみられ、伝

議倉期においては、今日のように定家本が一般に流布していた 鎌倉期においては、今日のように定家本が一般に流布していた がである。

【図版】断簡⑥

本	本文異	同	表】		
No.	歌番号	咢	伝寂蓮筆切	定家本	断簡と一致する諸本
1	480	歌	わひしきは	あやしきは	元
2	481	作	躬恒	凡河内みつね	黒元後
3	482	歌	こひやわたらん	こひ渡哉	黒
4	561	作	友則	紀とものり	元



38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5
1074	1072	1011	1006			1005	1003	995		962	961	957		884	883		880		859		858	829	807	763	722	677		672			645	644	592
訶	歌	作	歌	歌	歌	歌	歌	作	詞	詞	作	詞	詞	詞	歌	歌	調	詞	詞	詞	詞	作	歌	歌	歌	歌	歌	歌	詞	詞	詞	詞	歌
とり物歌 神あそひの歌	てのあしたの	ナシ	みやのうちに	すこしつるかな	ときちらし	やまおろしも	ちりにつけてや	読人不知	はへりけるときに	たむらの御時	小野篁朝臣	いとけなきこを	よめる	月の	ゆかしかりける	いたらぬさとは	きたりけれは	よみて人に	心ちのたのもしけなく	よみておきて	なりにけるに	小野篁	人はうらみし	人の心に	うはなみはたて	かつ見るひとを	かくすとすれと	みつあさみ	ときに	まかりける	かりのつかひに	人にあひての	ねさしとまらぬ
とりもの、うた	· 0)	よみ人しらす	宮のうちは	すくしつる哉	こきちらし	山あらしも	ちりにつけとや	ナシ	侍けるに	田むらの御時に	たかむらの朝臣	いときなきこを	よみ侍りける	月も	こひしかりける	いたらぬさとも	きたりけるに	よみて人のもとに	心地たのもしけなく	よみをきて	なりにける時	小野たかむらの朝臣	世をはうらみし	君か心に	あたなみはたて	かつ見る人に	かくるとすれと	水をあさみ	時	まかりたりける	ナシ	人にあひて	ねさしと、めぬ
黒	黒任	元	志黒元永前天後	志	寛永前天後雅	志黒俗永前天任	俗任	元	志俗六寬永前天雅曆建	元永建	俗建	志元六寛永任	志黒六寛永前天雅	黒寛	黒	志黒	志黒元俗六寛永前天後雅建任	俗	志黒元俗寛永前天後雅曆建任	志俗天	俗	黒	志六寛天雅曆建	任	志黒元俗寛永前天後雅建任	志黒	志元六寛前天後任	志黒俗任	元後	志元俗六寬永前天後雅建任	志黒元俗六寛永前天後雅建任	志俗六寛永前天後雅曆建	志寛永前天後任

あふみのやおさこのかすはあるみの、うた

格六寬永前天後雅唐 基格六寬永前天後雅曆建任 基格六寬永前天後雅曆建任

注

(1) 小松茂美『古筆学大成』第四巻(講談社、平成元年)

(2) その後、久保木秀夫「本文データベースの一問題点と異本研究の可能性―古今集の異本・異文を例として―」(秋山虔編『平安文学史論考』武蔵野書院、平成21年)および鶴見大学第33回貴重支学史論考』武蔵野書院、平成21年)および鶴見大学第33回貴重なが、これまでまとまった報告はなされていない。

伝公任筆本については、小松茂美編『伝公任筆古今和歌集』(旺下、引用する『古今和歌集』の諸本は、同書資料編による。なお、(3) 久曾神昇『古今和歌集成立論』(風間書房、昭和35~36年)。以

雲林院にてよめる (惟喬御子)とっており、伝寂蓮筆切と相違しているので注意が必要である。(4) 既に指摘があるが、志香須賀本の異本歌は、次のような本文を文社、平成7年)によった。

いと、うきよのいとはる、かなさはきなきくものはやしにいりぬれは

注(1)解説。

 $\widehat{5}$ 

(6) 田中登『平成新修古筆資料集』第四集(思文閣出版、

平成20

(歌)」とのみ記している。だが、黒川本によれば基俊本には「東は「滑稽歌 誹諧歌」とあり、諸本においてはいずれも「誹諧(7) なお、独自異文であるため取り上げなかったが、側番の詞書に

※書:またこのか:に重見なした。 り、伝寂蓮筆切の独自異文である「滑稽歌」もそのような勘物に宮切韻同作、各滑稽…」という勘物があったことが注記されてお

(9) 国文学研究資料館のマイクロフィルムによる。和52年)において「真」とするもの。

(1) 田中登『平成新修古筆資料集』第一集(思文閣出版、平成12

(11) 久曾神昇『古筆切影印解説I古今集編』(風間書房、平成6年

[付記]

学図書館ならびに久保木秀夫氏に深く御礼申し上げます。 資料の閲覧・翻刻にあたっては特別なご配慮を賜りました、鶴見大

究員) (てらだ・つたう 本学博士後期課程・日本学術振興会特別研